

長野県木島平村公民館主催「ふるさと塾」を通じた地元学の展開

(代表) 佐々木 純也(地域創造学類 地域プランニングコース 二年)
上野 亮太 (地域創造学類 地域プランニングコース 二年)

指導教員

神谷 浩夫 (人間社会研究域 人間科学系 教授)

1. 背景と研究目的

私たちの地元である長野県木島平村は現在急激な人口流出が進行している。これを食い止めるためには、村民が地元の良さを再発見し同時に村外の人々にも恵まれた自然環境をPRすることが必要である。そのため木島平村では地元学の手法を導入し、公民館主催で「ふるさと塾」を開催する計画を策定中である。本研究では、村役場と連携しながら、「ふるさと塾」ではどのような人々に、何を学んでもらうことが村の活性化につながるのかを検討する。

i) 木島平村の概要

人口は約 5,000 人。長野県北部に位置し、長野市の北側に隣接している。第一次産業が中心の農村社会に加えスキー場や温泉地など観光地としても発達している。特に米は「木島平米」としてブランド化が成功しており、村のアスパラは日本でも有数の出荷量である。地元の観光資源としては木島平スキー場をはじめ、カヤの平と呼ばれる自然公園や馬曲温泉が主力である。しかし人口減少による遊休農地の増加や、急激な少子化など、地域の活力が現在も衰退し続けている。

2. 研究方法

「ふるさと塾」は地元学をヒントにしているが、木島平村ではこれを公民館主催で推進する計画である。しかし、これまで地元学と公民館活動を結び付けた研究は存在しない。そこで本研究では公民館による「ふるさと塾を通じた地元学」という新しい村おこしの手法を調査する。具体的には新しい形態の公民館として全国的に著名な滋賀県米原市米原公民館でヒアリング調査を行い、新しい公民館の運用手法を学ぶ。

また、木島平村でのフィールドワークを通じて木島平村の埋もれた「お宝」を発掘して「ふるさと塾」のテキストに盛り込む内容を精査し、想定される受講者を年頭に置きながら、地元学を地域活性化と結びつける手法を検討した。

3. 研究成果と考察

i)米原公民館の視察結果

生涯学習活動を通じたコミュニティの育成手法を発見した。公民館活動に市民を巻き込み、市民自らが公民館活動を提案していくという形である。具体的には、公民館活動をロビーに集中することで情報発信を強化し、役所仕事の公民館のイメージを変える等である。また学童保育を公民館内で行うことで、公民館において母親同士、子供同士の交流を生み出すことに成功していた。

ii) 木島平村での調査結果

木島平村の現状を把握するため地元でのフィールドワークやヒアリング調査を行った結果、木島平の形骸化してしまった伝統行事やの同村には形骸化している村の伝統的文化や伝統食、名称のみが残り消失している文化を多く確認することができた。特に地元の伝統料理は数が多く、農村の季節行事に結びついた独自の料理であることを確認した。

例、やしょうま、いなか結び

活動を通して、木島平の現状を確認することができた。木島平の武器として、米や野菜などの農産物は質が高く、観光資源もバリエーションに富んでいることが分かった。しかし、その現状は地域全体で弱体化している。

iii)考察

この原因には二種類あると考えられる。一つが社会的、経済的要因で、具体的にはバブル以降のスキーブームの収束や、地元の特産物や観光資源に差別化を図れなかったということである。また、就農者の減少と大規模企業の進出による農業の衰退も挙げることができる。

これら産業基盤の弱体化に、もう一つの原因である少子高齢化（高齢化率 31%全国平均よりポイント高い）や過疎離村（人口は合併後村ができた当時の 6 割強）といった木島平の地域的要因が加わることで、木島平の現状は非常に困難なものとなっている。

以上のような現状からは木島平を今後発展させていくことは困難であり、むしろ現状を維持することすら危うい状態であると考えられる。問題は木島平を劇的な活性化促進を導く方策を導くことではなく、改善の要因を徐々に誘発していくことが重要であると考えた。

そのような状況中、村ではどのようにふるさと塾を活用するつもりであるのか、市の職員にヒアリングを行った結果、村ではまだ具体的な受講者や講師の想定をしていないことが分かった。村では「ふるさと塾」の「内容」は詰めているが、受講者や講師を想定した「ふるさと塾」の「機能」があいまいなままとなっていることが判明した。

iv)研究の成果

木島平村に外部の人間が入ることで、村の地元住人の方が気付かない伝統行事や伝統料理の価値を再発見し、歳時記という形にまとめることができた。これは最終的に「ふるさと塾」の教本の一部原稿になる予定だが、調査によって得られた課題を解決するような活用を考えなければならない。

そこで我々は、公民館活動をベースにした木島平の修学旅行誘致を提案した。

木島平はブランド化に成功している木島平米などの良質な農産物と、カヤの平、ニコニコファームといった豊かな自然を活用した観光資源を持っている。しかし、実際を見てみると有力ではあるが有効的ではなく、地域活性の促進には困難である。

その原因の一つが差別化が難しいことである。つまりいくら質が良い農産物であったり、自然豊かな観光資源を有していたとしても、それらは全国各地に多くあり差別化を図ることが非常に困難であるため、せつかくのこれらの地域資源を十分に活かすことができず、地域活性すら困難な現状がある。

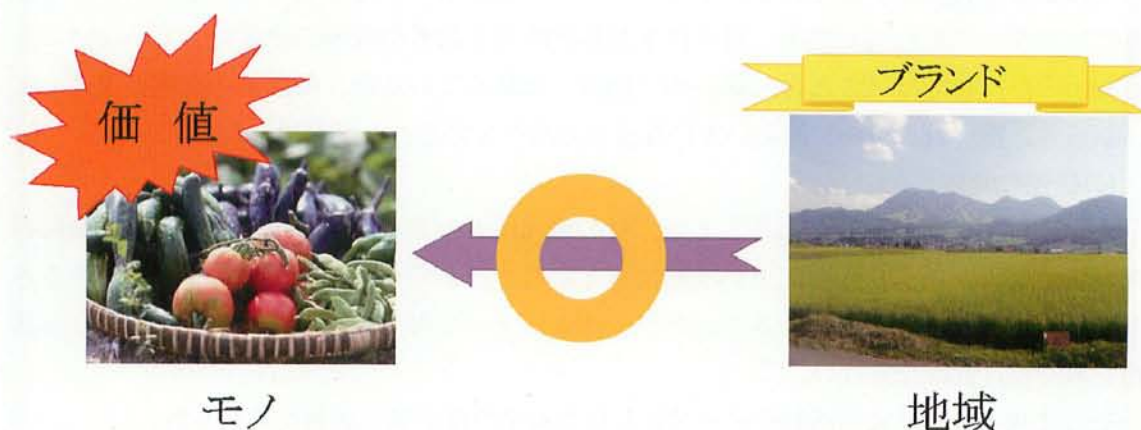
そこで、これまでとは違う地域活性の視点が求められる。図.1 のようにこれまでは農産物・観光資源（モノ）の活性促進から木島平（土地）の活性を目指していた。そうではなく、図.2 に示したように木島平という土地の活性促進から農産物・観光資源といったモノの活性に結びつける。土地にブランドイメージを付随させ、地域資源をも活かすことが可能である。

例、京都につく非常に大きなブランドイメージは、京野菜をさらに価値づけている。

図.1



図.2



そこで、木島平という土地をブランド化する方策・手段として「修学旅行」を用いる。修学旅行市場に参入することの実行可能性については、次のようなものである。

- ①第一想起される修学旅行地が定型化していること
- ②学校側の修学旅行に対するマンネリとそれに伴うニーズの変化
- ③修学旅行であるにもかかわらず内容は観光が主流であり、修学が達成できていない
(⇒観光型の修学旅行という概念からの脱却し修学旅行のメニューを増やす)

以上のことから、修学旅行がニッチ市場であり、十分参入可能であると判断する。その上で、木島平では観光資源に差別化を図れていないため、観光型ではなく、「食育」というテーマを設定し修学型の修学旅行として市場に参入し、木島平を売り出す。

「食育」の設定意義だが、ライフスタイルの変化から食生活まで変化が及んでおり、子どもたちは買えば何でも手に入る、つまり食に対して不自由がないことから食の大切さがないがしろにされていることが現状である、ということが一点。そして質の良い農産物を有した農村文化が存在しているということがもう一点である。木島平には衰退傾向にはあるが、今なお都会にはない農村文化が残っており、食べ物の作られている現場やその環境などの上記の問題を考えることができるフィールドになりえることが可能である。またこれこそが木島平の武器であるためである。

また、修学旅行の具体的な実施内容について検討した。

- ◎ 対象 : 主に小学生を対象 → 食育というテーマ性からは小学生が妥当
- ◎ 規模 : 1クラス 30人×3クラスの 100人規模を想定
(⇒木島平の規模を考えると 100人が限界である)
- ◎初期段階: 姉妹都市である調布市から段階的に実施
- ◎ 宿泊 : 村内の民家・民宿・農家を中心
→村内には隣接するスキー場のため活気のない民宿が多くある
→高齢者の方は来てくれることに喜びを感じる＝生きがいにもなりえる
- ◎指導者 : 『村民』
→農業体験や伝統食作り、宿泊など様々な場面に必要な指導者は行政職員ではなくノウハウをもった村民が主体的、意欲的に担う必要があります。つまり村を巻き込んでの地域活性の誘導ということになります。
また村民中心の方向の理由は地域活性において行政職員にやる気があり盛り上げても、活動主体の村民にやる気がなければ結果的に形骸化していくことが予想されるため、村民を指導者としての方向を考える。

以上のことから住民の活動の受け皿となる地域コミュニティが必要になる。そこで公民

館が主催する「ふるさと塾」を活用する。具体的には、「ふるさと塾」に二つの役割を持たせ、これを活用することである。

一つは、村民が相互的に講師や生徒となり、時には外部から有識者を招くことで衰退するふるさとの農村文化を再認識し、意識の向上を図るひとつのコミュニティとなることである。同村には形骸化している村の伝統的文化や名称のみが残り消失している文化が多く、修学旅行などを契機に見直す場、またお互いに議論できる場としても有効と考えられ、観光客向けの案内人の育成や地域おこしなどのコア人材などの人材育成の場でもある。もう一つは内向きの意識向上の場としてではなく、村内の魅力を村外に発信する場としても活用することである。これは行政が行う行政目線のものではなく、村民がお互いに自分たちの村の魅力を発見した後にそれを議論し形にしたものを、村民目線で村外に発信する意味合いがある。(観光、修学旅行プラン etc) 修学旅行プランに関しては学校側に売り込み営業を行う。

4. 結論

- ・「ふるさと塾」がコミュニティ形成機能を持たなければ、木島平の活性は達成されない。
- ・「ふるさと塾」では、村民がそれぞれ互いに生徒と講師をこなし、農村独自の文化を学ぶ。
- ・「ふるさと塾」の積極的活用、また外部に PR する施策として修学旅行誘致が有効である。
- ・以上が達成される「ふるさと塾」は木島平の活性に有効である。